

袖ヶ浦市山野貝塚出土の骨角器

吉野 健一

1. はじめに

袖ヶ浦市山野貝塚は袖ヶ浦市飯富に所在する縄文時代後期から晩期の貝塚で、小櫃川下流域右岸の標高約35mの台地上に位置している。これまで、財団法人千葉県都市公社、財団法人千葉県文化財センターにより発掘調査が行われており、縄文時代後期に属する竪穴住居跡、後期前葉から後葉に属する貝層などが検出されている（財団法人千葉県都市公社1973、財団法人千葉県文化財センター1993）。

今回報告する骨角器は、1993年に財団法人千葉県文化財センターによって行われた重要遺跡確認調査に伴い出土したもので、財団法人千葉県文化財センター（1993）には未報告の資料である。一連の重要遺跡確認調査は、県内の主な貝塚の基礎データを収集・公表する目的で行われた学術調査であり、報告書のページ数が限られていたことから、遺跡によっては、未掲載の資料にも重要なものが多く含まれている。今回は、未掲載資料の一つとして、山野貝塚資料を取り上げた。

2. 資料の概要

資料は、細身のヘラ状の角製品である（写真1）。サイズは全長47mm、幅9mm、最も厚い部分で厚さ6mmである。先端は厚さ1mm弱で、先端から約8mmのところまで厚さ2mm程度となる。鹿角の先端付近を用いたもので、背面には緻密質がよく残り、内面には海綿質が見られる。先端部には外面にカットマークが見られ、意図的に薄く剥ぎ取られている。先端部以外は、製作過程の成り行きで割れたものと考えられ、体部は捻れた状態で割れている。全体に研磨したような明瞭な痕跡は見られない。体部の作りが無造作であるのに対

し、先端部が薄く作られているのが特徴といえる。基部（先端部の反対側）も、折れたままのような状態で、擦痕などは見られない。

3. 出土位置と時期

本資料が出土した位置は、西貝層の南端に設置された10トレンチである。調査は表土を除去し、貝層および遺構を検出した状況で、全体の掘削はストップしている。西貝層の南端部と、住居跡が1軒検出されており、出土している土器は、ほとんどが堀之内式に属するものであることから、今回報告する資料も堀之内式期のものであると考えられる。

4. おわりに

本資料は、未掲載資料の中でも目立たないもので、通常の調査報告書の中では骨角器として取り扱うべきか微妙な位置づけの資料であると考えられる。しかし、県内外の貝塚出土獣骨や骨角器として取り上げられている資料の中に、本資料のような細身で先端が薄く作られた骨角器が散見されることから、共通する目的で製作、使用された可能性があると考えられる。これらの資料は未報告であったり、ヤス、骨篋などの様々な名称で報告されている場合もある。

今回は資料の報告のみを目的とした。これらの遺物の性格などは、あらためて検討する必要がある。

参考文献

- 財団法人千葉県文化財センター（1993）『袖ヶ浦市山野貝塚発掘調査報告書』
- 財団法人千葉県都市公社（1973）『袖ヶ浦町山野貝塚』



写真1 山野貝塚出土の角製品

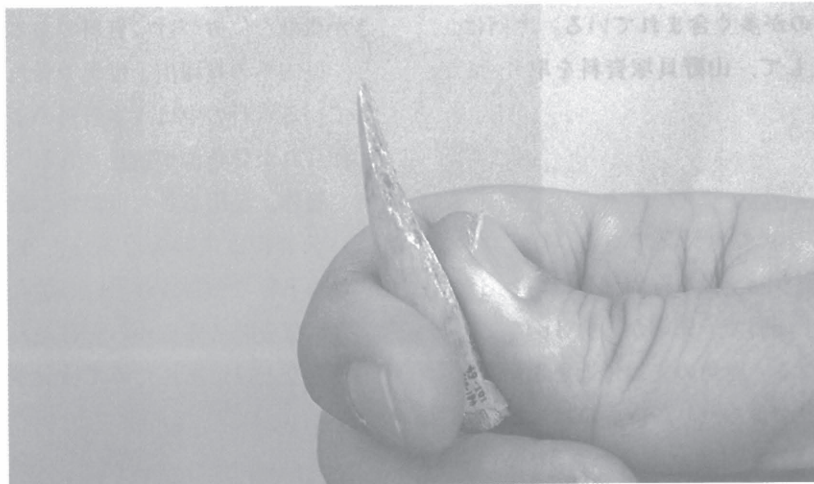


写真2 角製品の先端部